

# フッサール現象学における時間・空間論

——谷徹教授退職記念に寄せて——

浜 渦 辰 二

九四

## 1. 切磋琢磨の交錯史

畏友・谷徹氏との出会いから話を始めよう（記憶を頼りに書くため、記憶違いがあるかも知れないことをお断りしておく）。私が谷氏と初めて出会ったのは、一九八七年五月二五日、國學院大學で開催された日本現象学会第九回研究会で、私が研究発表「他者経験の構造と発生・フッサール相互主観性の現象学をめぐって」を行った時、司会を勤めていただいたのが谷氏であった。私は、一九八四年七月から、D A A D（ドイツ学術交流会）の奨学生として、ドイツ（当時は西ドイツ）のフライブルクでのゲーテ・インスティトゥートでの二ヶ月の語学研修の後、ケルン大学に一年間、ヴッパータール大学に一年間、それぞれ滞在したあと一九八六年九月に帰国し、翌一九八七年四月から西南学院大学で非常勤講師を始めてすぐの頃で、帰国してから入会した日本現象学会での個人研究発表デビューだった。谷氏の方は、そこで司会を勤めるほどで、すでに学会から一目置かれた存在だったと思われる。翌年発行された日本現象学会編『現象学年報4』（一九八八年十一月）に、私の発表要旨「他者経験の構造と発生・フッサール間主観性の現象学をめぐって」（サブタイトルを変更）が掲載されたが、同誌には、谷氏の論考「隠れたる自然―現象学と非現前の思惟」が掲載されていた。私の同誌での論文デビューは、さらに二年後の『現象学年報6』（一九九〇年十月）に掲載された「相対性の復権

と相対主義の陥穽―フッサール間主観性の現象学の問題圏にて―」なので、谷氏は私より二年早い論文デビューだったわけだ。

初めての出会い以来、日本現象学会だけでなく、当時毎春秋に八王子の大学セミナーハウスで行われていた現象学解釈学研究会でも毎回お会いするようになり、関心が近いこともあり、個人的な交流も始まり、手紙のやりとりもするようになった。当時、私は留学前の九州大学大学院時代から福岡市に住んでいたが、谷氏は一九八六年から北九州市にある九州歯科大学に着任しておられ、何の機会だったか、一度北九州市のご自宅に招かれたこともあった。その後、一九九一年に私は静岡大学人文学部に着任し、一方、谷氏は一九九四年に東京の城西大学に、さらに一九九六年には城西国際大学に転任された。私は、一九九五年に博士論文に基づく処女作『フッサール間主観性の現象学』（創文社）を刊行し、他方、谷氏は、一九九八年に大著『意識の自然―現象学の可能性を拓く―』（勁草書房）を刊行された。

翻訳の仕事も、谷氏は、遡って一九八四年に共訳でエルマー・ホールレンシュタイン『認知と言語―現象学的研究』（産業図書）、一九八八年に共訳でクラウス・ヘルト『生き生きした現在―時間の深淵への問い』（北斗出版）、一九九〇年に単訳でデトレフ・フォン・ウスラー『世界としての夢―夢の存在論と現象学』（法政大学出版局）を刊行され、他方、私は、二〇〇〇年に単訳でヘルト『20世紀の扉を開いた哲学―フッサール現象

ちょうどその年（二〇〇三年）の四月から、谷氏は立命館大学文学部に転

フッサール現象学における時間・空間論

学入門―（九州大学出版会）、二〇〇一年に同じく単訳でフッサール『デカルト的省察』（岩波文庫）を刊行した。

二〇〇二年十一月には、谷氏は、一般向けの新書版の現象学入門書として、『これが現象学だ』（講談社現代新書）を刊行した。私は二〇〇三年三月に学内で発行された或る冊子に執筆した「私の哲学思想への手引き」の最後に「読んで欲しい本」五冊中の一冊としてこの刊行されたばかりの本を挙げた。その時の紹介文を引用しておこう。

最後に、私の畏友の近著を紹介しましょう。難解と言われるフッサール現象学を分かりやすく、しかし、レベルを落とすことなく、広い視野を保ちつつ、「解」き「説」いたもので、新書版の現象学入門書としては、木田元『現象学』（岩波新書、一九七〇年）以来、三二年ぶりの快挙と言えます。二〇〇二年は「フッサール・ルネサンス」の年（拙稿「フッサール・ルネサンス」日本現象学会編『現象学年報』18、二〇〇二年十一月）になりましたが、同じく畏友・山口一郎『現象学』ことはじめ』（日本評論社、二〇〇二年一月）、畏友・斉藤慶典『フッサール起源への哲学』（講談社選書メチエ、二〇〇二年五月）と並んで、その状況を代表する一冊となりました。私としては、キーワード「現象学」で述べたような論点をもっと明らかにしてほしかったこと、キーワード「間主観性」で述べた問題が、さまざまな現象学の特殊問題の一つのように扱われて、現象学の問題全体に関わってくるものであることが不鮮明であったこと、など不満の残るところがないわけではありませんが、いま現象学の最良の入門書を一冊挙げるとすれば、筆頭に挙げるべき書です。

任され、同年十月に開催された立命館大学哲学会シンポジウム「現象学以後の／による現象学―21世紀の扉を開くために―」に呼んでいただいた私は、提題「フッサールにおける現象学と存在論」を行った。実は、静岡大学の私の前任者である池田善昭氏が、谷氏より早く立命館大学に転任しており、谷氏と同僚になったおかげで、お二人の力でお声をかけていただいたものと思う。

これら出版関係の仕事と並行して、一九九四年四月から一九九七年三月まで、科学研究費研究成果公開促進費・データベース（代表：浜渦）の補助により、「フッサール・データベース」を構築し、インターネットで検索結果を公開したが、谷氏には共同研究者として協力いただいた。その後、前述の現象学解釈学研究会が幕を閉じた後を受けて、二〇〇二年三月に、同じ八王子大学セミナーハウスで、フッサール研究会の創立記念・第一回研究会を開催したが、その呼びかけ人の一人となっていたいた。また、二〇〇二年四月から二〇〇五年三月まで、科学研究費・基盤研究（B-1）による研究課題「新資料・新研究に基づく、フッサール現象学国際的研究の新しい地平の開拓」（代表：浜渦）により、フッサール研究国際会議 in Japan を四回開催したが、その共同研究者としても協力いただき、海外から研究者を招へいする際の窓口の一人として活躍いただいた。また、二〇〇六年四月から二〇〇九年三月まで、科学研究費・基盤研究（B-1）の研究課題「いのち・からだ・こころ」をめぐる現代的問題への応用現象学からの貢献の試み」（代表：榊原哲也）では、谷氏とともに共同研究者を勤め、また、二〇〇八年四月から二〇一四年三月までは、科学研究費・基盤研究（B-1）の研究課題「多極化する現象学の新世代組織形成と連動した「間文化現象学」の研究」（代表：谷徹）では、私が共同研究者を勤めさせていただいた。

その後、私は二〇〇八年に大阪大学大学院文学研究科に転任し、

二〇一八年三月に定年退職するまで、十年間大阪大学の教壇に立つことになった。そのかん、二〇一一年度に谷氏から請われて立命館大学の非常勤講師としていくつかの講義・演習を担当させていただいた。しかし、残念ながら、当時住んでいた豊中市から立命館大学衣笠キャンパスまでは片道二時間ほどかかり、朝から出かけて二コマの授業をして夕方帰宅するとう、一日がかりの仕事に疲れてしまい、一年だけで辞退させていただくことになった。一年間だけであったが、立命館大学の学生・院生・卒業生や同僚の方々と接することができたのは、その後にも繋がって行くいい機会となった。

その他、学会活動のなかで、とりわけ日本現象学会では、ともに長らく委員を勤め、大会や委員会でご一緒する機会も多かった。また、河合文化教育研究所の木村敏氏を中心として二〇〇〇年から一八年間続いた河合臨床哲学シンポジウムでは、おそらく谷氏が運営委員を勤めておられたこともあつてと思うが、二〇〇六年に発表の機会を、また二〇一三年には司会の機会を与えられ、論文集に二本の論文を掲載させていただいた。<sup>⑤</sup>「二つの臨床哲学」と題して、一方の木村敏氏の臨床哲学と、他方の大阪大学で鷺田清一・中岡成文両氏が始め私が引き継いでいた臨床哲学とを、比較しながら論じる機会を得たのも、谷氏が橋渡ししてくれたおかげであった。

以上のように、振り返ってみれば、三〇年以上に渡って交錯する学術交流のなかで、私はほとんど同世代の谷氏とお互いに切磋琢磨をし、関心を共有しながらも互いに距離を保ちつつ、ともに成長してきたのだと思う。こういう「離れて共に歩む人」がなかったら、今の私があつたかどうかは、分からない。次節では、もう少しお互いの研究内容に踏み込んで、谷氏の研究と私の研究の「近さと距離 (Nähe und Distanz)」を論じたいと思う。

## 2. 時間・空間への問い

前述のように谷氏が共訳者となったヘルト『生き生きした現在―時間の深淵への問い』（一九八八年）はフッサール晩年の時間論を当時未刊行だった草稿をもとに考察した名著だったが、谷氏は前述の論考「隠れたる自然―現象学と非現前の思惟」（一九八八年）でもフッサールの時間論に言及していたし、ヘルトの同書の共訳者である斎藤慶典氏も、「フッサール初期時間論における〈絶対的意識流〉をめぐって」（日本哲学会編『哲学』37号、一九八七年）でフッサール時間論を論じていた。その頃、この二人のみならず、私とほぼ同世代のフッサール研究者の多くが、フッサールの時間論について考察しており、私もその例に漏れるものではなかった。<sup>⑦</sup>

しかし、私は前述のようにドイツに留学した時、一年目のケルン大学では、『エドムント・フッサールの空間構成の理論』（Edmund Husserls Theorie der Raumkonstitution, Martinus Nijhoff, 1964）の著者ウルリッヒ・クレスゲス教授に手紙を書いて受け入れ教員になっていただいた。その師であるルートヴィッヒ・ラントグレーベは、エディット・シユタインの後、フッサールの助手を務め、フッサール没後、オイゲン・フィンクとともにルーヴァンのフッサール文庫を軌道に乗せた人で、その後ケルン大学教授となり弟子を育ててケルン学派と呼ばれたが、その門下生として頭角を現したのが、空間論のクレスゲスと時間論のヘルトだった。ところが、私が留学した頃には、クレスゲスはすでに現象学研究から離れ、ドイツ観念論から分析哲学へと関心を移していた。それでも、私をケルン大学にあるフッサール文庫支部に連れて行ってくださり、当時助手を務めていたデーター・ローマー氏（現在はケルン大学教授）と引き合わせていただき、文庫の研究環境を自由に使わせてやってくれと紹介

していただいたことには、感謝しなければならない。そのローマー氏が、半年後に、二週間に一度ヴッパータール大学でヘルト教授が行っている現象学コロキウムに参加しているので、一緒に行かないかと誘ってくださり、同行するようになった。そして、翌年にはヴッパータール大学に席を移し、もう一年間、ヘルト教授のもとで学ぶことになった。こうして私は、フッサール空間論のクレスゲスとフッサール時間論のヘルトのもとで学んだことになる。そんなこともあって、他の同世代の研究者たちがフッサール時間論に取り組んでいるようなら、私はむしろフッサール空間論に焦点を当てながら<sup>⑧</sup>。フッサールの現象学的時間論と現象学的空間論をセットにして論ずることを課題とすることにした<sup>⑨</sup>。しかも、ひよんなことから、ドイツ留学中にフッサール『間主観性の現象学』全三巻（『フッサール全集』第十三〜十五巻）の読破に専念したことから、時間と空間を間主観性の問題圏で論ずることに関心を寄せるようになった。

フッサールの時間論は主に三つの時期に分けられ、一八九三年から一九一七年までの講義録と草稿から成る初期の『内的時間意識の現象学』（フッサール全集第十巻）、一九一七―一八年の草稿から成る中期の『時間意識についてのベルナウ草稿』（同第三三巻）、一九二九年から一九三四年までの草稿からなる後期の『時間構成についての後期テキスト―C草稿』（同資料集第八巻）のテキストがある<sup>⑩</sup>。他方、フッサール空間論としては、初期には、一八八六年から一九〇一年の草稿から成る『算術と幾何学の研究』（同第二二巻）、一九〇七年の講義録と草稿から成る『物と空間』（同第十六巻）、および、晩年には、『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（同第六巻）、なかでも付論三「志向的歴史的問題としての幾何学の起源への問い」、M・ファーバーのフッサール記念論文集で公開された晩年の草稿「自然の空間性の現象学的起源に関する基礎研究―コペルニクス説の転覆」<sup>⑪</sup>のテキストなどがある<sup>⑫</sup>。こうして見ると、フッサールは、初

期から晩年に至るまで、折りにふれて、時間・空間を論じていたことが分かる。

しかし、そもそも、なぜフッサールは時間と空間の問題に取り組むようになったのだろうか。ここでは、裏付けるための参照箇所を挙げる余裕がないが、おそらく次のような事情から来ているのだろうと思われる。フッサールは、一九〇〇年に刊行した『論理学研究』第一巻では、論理学を心理学によって説明しようとする心理学主義の誤謬を、リアルなもの（イデアルなもの）の「領域の混同」「他の類への移行（メタバシス）」として批判し、リアルなもの（イデアルなもの）の間には「永遠に橋渡しのできない根本的本質的な相違」があると述べていたが、翌一九〇一年に刊行した同第二巻では、両者の区別を言うだけでは「到底、満足できない」と述べ、「イデアルなものはリアルなものにどのように関係しているのか」が問題となるとして、「ここに現象学的分析が始まる」と述べて、両者が出会う一つの場面として第一研究「表現と意味」から始めていた。しかし、「リアル／イデアル」という用語は伝統的にさまざまな含意をもって使われてきたため誤解を招きやすいということで、一九一三年に刊行した『イデー』第一巻では避けるようになるのだが、その用語でフッサールが言わんとしていたのは、「リアル」とは時間・空間において限定されている（特定の時間・空間に位置づけられている）ことであり、「イデアル」とは時間・空間において限定されていない（そのように位置づけることができない）ことであった。時間・空間において限定されている（位置づけられている）とはどういうことなのか、そして、どうしたら時間・空間において限定されないもの（イデアルなもの）が限定されたもの（リアルなもの）と関係することができなのか。こうしたことを解明するためには、そもそも時間・空間とは何かを解明されねばならないが、その際に、科学的でないし物理学的な時間・空間をあらかじめ与えられたものと

して前提することはできない。そこで、まずは、時間・空間がどのような形に現れているかという、現象学的分析から始めることになったのである。

### 3. 時間と空間の現象学

フッサールは『内的時間意識の現象学』の序論を、時間について「もし誰も私に問わなければ、私は知っている。もし問う者に解き明かそうとすれば、私は知らない」というアウグスティヌスの言葉を引用することから始めていたが、同じことは空間についても言えるだろう。時間に劣らず空間もまた、私たちが普段当たり前（自明）のことと思っていながら、いざ「それは何か」と尋ねられると答えに窮してしまうものである。なぜなら、それらは、カントの用語を借りて言えば、「経験に先立ちながら、経験を可能にする」という意味で「超越論的」なものだからである。しかし、時間・空間を「感性の形式」として超越論的感性論において論じたカントに比べると、フッサールは、それをまったく異なる意味で「超越論的」なものとして捉えた。フッサールの現象学は、カントの超越論哲学を根本的に改造しようとするものだった。

前述の『算術と幾何学の研究』に収録されたテキスト（一八九二／三年）で初期のフッサールは、「学問外の (außerwissenschaftlich) 意識にとつての空間、子どもであれ大人であれ、専門家であれ素人であれ、誰もが生き生きとした知覚や想像において見出すような空間」である「直観的空間」と、「学問的思惟の空間、学問外の意識のもつ空間表象の論理的加工による概念形成物である幾何学的空間」とを区別し (XXI, 271)、「直観的空間からの純粹幾何学の空間の発生」(XXI, 406) を説明することを課題として立てていた。それについて、中期のフッサールは、『イデーニー

の手沢本に後から付け加えられた注意書きに、「経験のカント的な概念を根底においてはならない。そうではなく、前理論的な経験の概念を、そして何よりも前学問的な生において現に体験されているような、調和的に進行する知覚の概念を根底に置かねばならない」(III/2, 497) と述べていた。フッサールによれば、カントは「幾何学の空間」と「直観的空間」とを区別しなかったため、「直観的空間」を論じているつもりで「幾何学の空間」の議論を持ち込んでしまっていた。空間の問題を扱うためには、まず、この両者を区別し、「下から」すなわち「直観的空間」から明らかにし、その後初めて、そこから「幾何学の空間」がどのように「発生」したのかを明らかにせねばならないのであった。この前学問的な「直観的空間」は、後の「生世界の (Lebensweltlich) 空間」を先取りするものと言えよう。

一九〇七年の講義『物と空間』でフッサールは、「前学問的自然の問題圏と学問的自然の問題圏」とを分け、「まず前学問的自然——もっぱら経験的な直観において与えられる（それゆえ、カントの意味での「経験」ではない）——にのみ超越論的な問いを向け」(XVII, 272) ようとした。そこでフッサールは、「知覚において、対象は自我身体 (Ichleib) との関係を持ち」(XVII, 10)、「それ（自我身体）は、あらゆる空間的な状態がそれとの関係において現出するような、常に存する関係点であり、それが現出において左右、前後、上下を規定している」(XVII, 80) という。後に『イデーニー』のフッサールは、「空間的な存在のないところでは、さまざまな観点 (Standpunkt) から、変化する方位づけ (Orientierung) において、さまざまな側面から、さまざまなパースペクティヴ、現出、射映 (Abschattung) において見ると語ることは意味をなさない」と述べているが、逆に言えば、「直観的空間」においては、すべてが「自我身体」を「ここ」とする「観点から、方位づけにおいて、側面、パースペクティ

ヴ、現出、射映において」与えられるのである。

「」でもう一つ指摘して置きたいのは、フッサールが、或る対象と別の対象との間の「間隔 (Abstand)」と、「私の身体」と或る対象の間の「距離 (Entfernung)」とを区別し、「本来的な意味では距離は、このような間隔としては与えられない。それは本来的な意味では知覚可能なものではないのである」(XVII, 228)とされていることである。つまり、「距離」というのは、「私の身体」(私の視点)から或る対象までの「興行き」とも言うべき「生きられる空間」であるが、「間隔」というのは、第三者的な視点から俯瞰され、測量される「幾何学的空間」なのである。一九二〇年代の『間主観性の現象学』に収録されたテキストでフッサールは次のように述べている。「私の身体は或る仕方で原運動的 (unbeweglich) な客体である。……あらゆる場所と間隔は私の身体に対して構成的な関係を持つている。……間隔の知覚は、私が或る場所へ、また別の場所へ身を置き、また或る場所から別の場所へ動くということによって実現される。……或る物体の私からの間隔 (その距離) は原間隔 (Urabstand) であり、これが別の物体相互の関係に移されるのである。それらが互いに距離を持つているのは、私が一つの場所に身を置き、そこから別の場所へと行くことができることによつてである」(XIV, 541-544)。ここに述べられているのは、或る物体と「私の身体」の間のキネステーゼ的に(受動的綜合によつて)構成される距離こそが、或る物体と別の物体の「相互外在 (außereinander)」的な間隔に対して、「原間隔」として機能する(後者は前者に基づいて構成される)、ということである。すなわち、空間における二つの物体の間隔というのは、私とその距離を「通り抜ける」こと、私と一つの物体から別の物体への「行く」ことによつて初めて捉えられるのである。或る物体の「私の身体」からの「距離」こそが「原間隔」なのである。こうして、等質的な「幾何学の空間」(客観的空間)は、「直観

の空間」(現象学的空間)におけるキネステーゼ的な運動によつて構成されるのである。

『内的時間意識の現象学』に話を戻せば、フッサールはその序論で、一方の「客観的時間」とその遮断により「現出する時間」との対比と、他方の「客観的空間」とその遮断により「現出する空間」との対比とを比喩的に語り、第九節では、「空間的パースペクティヴに類似した一種の時間的パースペクティヴ」(X, 26)を語り、本来は空間において使われる「パースペクティヴ」という用語を時間にも比喩的に使うことを提案している。「把持 (Retention)」と「予持 (Protention)」を「時間の庭 (Zeithof)」と呼び、それらが「今の生き生きした地平 (Horizont) を構成する」(X, 43)という時にも、「空間的な背景 (Hintergrund)」と同様に、「前景は背景なしにありえない (Vordergrund ist nichts ohne Hintergrund)」。現出する側面 (Seite) は現出しない側面なしにありえない」(X, 55)と、これまで「直観的空間」を論ずる際に使ってきたこれらの用語を、ここ現象学的時間を論ずる時にも比喩的に使おうとしていることが分かる。つまり、「空間の構成と時間の構成は平行する (parallel) 問題である」(X, 120)とも述べるように、現象学的時間論を現象学的空間論とパラレルに展開しようとしているのである。しかし、同時に、「空間事物の構成は時間構成を前提している」(X, 94)として、現象学的時間論は現象学的空間論の基層を成している(前者が後者を「基づけ」ている)ことも考えられている。現象学的空間論が、私の身体を「絶対的な」(零点)として広がるパースペクティヴにおいて左右・前後・上下をもった非等質的な空間からいかにして等質的・幾何学的・客観的な空間が構成されるかを説明しようとするのと平行するように、現象学的時間論は源泉点としての「今」の「生き生きした地平」をなす「把持」(ついさつき)と「予持」(もうすぐ)という非主題的な志向性による非等質的な時間からいかにして等質的・

物理学的・客観的な時間が構成され、主題的な過去の「想起」や未来の「予期」が可能となるかを解明しようとするのである。

しかし、ここではこのようなフッサール現象学の時間・空間論をさらに追跡することは控え、谷氏と私の関係に関する話に戻ることにはしたい。それというのも、前述のようにヘルトによる後期フッサールの時間論である『生き生きとした現在』の共訳者である谷徹氏が、万全を期して成し遂げた訳業であるフッサール『内的時間意識の現象学』（ちくま学芸文庫、二〇一六年）が、ちょうど私が山口一郎氏との共同監訳により刊行したフッサール『間主観性の現象学』三巻本（ちくま学芸文庫、二〇一二年、二〇一三年、二〇一五年）の後を追うように刊行されたからである。ここで取り上げたいのは、二〇〇六年から始まり、これら翻訳の刊行を挟んで二〇一八年まで、私にとつとも畏友である谷氏と山口氏との間で、「過去把持の二重の志向性」<sup>⑤</sup>をめぐって行われた、通称「谷・山口論争」のことである。

本稿冒頭で言及したように、私が谷氏と初めて出会ったのは、一九八七年五月の日本現象学会においてであったが、私が山口氏と初めて出会ったのは、その前年の、私が帰国する前、一九八六年六月トリアーで開催されたドイツ現象学会の場で、新田義弘先生に紹介されてお話しした時であったと記憶する。当時、確かポツダム大学で日本語の講師をしておられたと思うが、すでに『現象学叢書』のシリーズで *Passive Synthesis und Intersubjektivität bei Edmund Husserl* (Phänomenologica Bd.86, 1982) を刊行していて、ドイツの現象学研究者の間でも一目置かれていた。その後帰国して、東洋大学文学部に着任され、前述のように二〇〇二年のフッサール研究会の立ち上げにあたっては、呼びかけ人の一人になつていただき、また、科学研究費・基盤研究（B-1）の研究課題「新資料・新研究に基づく、前述のフッサール現象学国際的研究の新しい地

平の開拓」（代表：浜渦）でも、山口氏にはドイツのフッサール研究者との橋渡し役の一人として活躍していただいた。そして、前述のように、フッサール『間主観性の現象学』全三巻（ちくま学芸文庫）の翻訳では共同監訳者として、共同作業を行ってきた間柄である。このようにともに尊敬する谷氏と山口氏が行った論争について、私はこれまでずっと沈黙を守ってきたが、ここで私なりの考えを述べておくのはお二人に対する礼儀と言ふべきだろう。

#### 4. (過去) 把持の二重の志向性

論争の発端となつたのは、山口氏の著書『存在から生成へ—フッサール発生的現象学研究』（知泉書館、二〇〇五年）について、谷氏が『週刊読書人』（二〇〇六年二月三日号）に発表した書評「著書による「闘争」の書」であった。そこで谷氏は、フッサールの『受動的綜合の分析』（国文社、一九九七年）の共訳者でもある山口氏の新著が、自覚的（能動的）次元が成立する以前に生じている「受動的綜合」を出発点にして経験を解明する「発生的現象学」を「見事に際立てた」のは「大きな収穫である」と評価しながらも、いくつかの重要な基礎概念について「標準的理解」に反して「不明確」であると指摘した。その一つが、フッサール『内的時間意識の現象学』第三九節「把持の二重の志向性と意識流の構成」で論じられた「縦の志向性」と「横の志向性」の理解であった。

この書評に対して山口氏は、同じ『週刊読書人』（同年二月二四日号）で反論を寄せ、谷氏の指摘は「過去把持の二重の志向性の誤訳によるフッサール時間論の曲解」であると断じた。すなわち、山口氏によれば、*Querintentionalität* を「縦の志向性」と訳し、*Längsintentionalität* を「横の志向性」と訳すべきところを、谷氏だけでなく、『内的時間意識の

現象学』の標準的訳語（立松弘孝訳）も『現象学事典』の「時間」の項目（斎藤慶典）と「時間意識」の項目（榎原哲也）に見られる訳語もすべて、「縦と横を逆にして」、前者を「横の志向性」、後者を「縦の志向性」と訳している」と「誤訳」を指摘する（以下、両者の間で「縦と横が逆」になるので、その点を注意しながら、読み進めていただきたい）。つまり、山口氏の訳語の選択の論拠はこうである。

Querintentionalität の quer は、「道を横切る」ときの quer であり、また、「流れや道の方向に抗して、横に渡す」という意味が原意だ。したがって Querintentionalität は、もし時間の流れが、フッサールの時間図式にあるように、左から右に水平線上を横に流れる場合、それを横切れば、当然、縦となり、垂直を指す縦の方向を意味し、「縦の志向性」と訳すべきである。それに対して、Längsintentionalität は、元来、entlang「に沿って、を辿って」の意味であり、「流れに沿って」というように使用され、流れが左から右への方向をもつ場合、それに沿うのは横の方向であり、横軸の「横の志向性」とするのが、適訳である。

これに対して、谷氏は、同じ『週刊読書人』（同年三月十日号）で反論「誤訳問題にあらず」を掲載し、「縦と横を逆にして」という山口氏の誤訳の指摘に対しては、「とりあえず逆でもよい。これは入り口にすぎない」として、「私の主眼はまず（縦横より）「二重」ということの意味理解に関わる」という。つまり、「把持は、過ぎ去っていく客観（の感覚現出）を把持するだけでなく、自己自身を把持するという二重性をもつ」ということが重要だという（この点は山口氏も否定しないだろう）。それに対して更に、『週刊読書人』（同年三月十日号）に山口氏の再反論「誤訳と曲

解の関連について」が掲載された。山口氏の強調したいところは、「過去把持の志向性は、「統握作用—統握内容」という「形式—内容」の認識構図では理解できない、特有な志向性（後に「受動的志向性」と規定される）である」というフッサールの見解である（この点は谷氏も否定しないだろう）。そして再び「誤訳」問題に立ち戻り、それが「曲解」に繋がるのは、「谷氏が、過去把持の「横の志向性（横軸）」において時間内容が構成されると訳出するときであるという。というのも、山口氏によれば、「時間内容が構成される」のは、「縦の志向性（縦軸）」においてであるから。山口氏の著書『現象学ことはじめ—日常に目覚めること』（日本評論社、二〇〇二年）には、巻末に「現象学の基本用語と索引」がつけられ、「縦の志向性」の項目には次のように記されている。

原印象が過去把持される経過において、原印象が次々に継起して、過去把持と対になる方向を横の志向性と呼び、それについて過去把持の連なりを通して意味のまとまりができあがり、持続の長さが決まってくる、そのような過去把持の方向を縦の志向性を呼ぶ。（同書、三二三頁）

山口氏からすると、「縦の志向性（縦軸）」が重要で、譲れない論点であった。この論争の発端となった山口氏の『存在から生成へ』は、フッサール初期の『内的時間意識の現象学』から中期（一九一八—二六年）の『受動的総合の分析』に繋がる時間論とりわけ過去把持論を一つの重要な論点としていた。つまり、そこで山口氏は、「受動的総合としての過去把持」こそが、「カントにとって謎のままにとどまった構想力を、超越論的に解明しえた」ものだった（三三三頁）。そこで、「縦の志向性」について、次のように述べている。



その際、特に重要なのは、過去把持の「縦の志向性」であり、「それは、流れの経過の中で、自分自身との絶えざる合致統一においてある」(X, 81)とゆうように、絶対的時間流の自己一致は、過去把持の縦の志向性において確認されているのです。そして、この合致統一こそ、二〇年代に本格的に分析、展開される受動的綜合として定題化されるものに他なりません。『時間講義』から『受動的綜合の分析』に向かう時間分析の深化とは、過去把持の縦の志向性における時間内容の自己構成の分析上の進展を意味します。(一五九頁)

しかも、山口氏によると、「興味深いことは、近年、『ベルナウ時間草稿』が刊行され、ここで、時間形式が中心になる『時間講義』と、時間内容に重点を置く『受動的綜合の分析』における、具体的に生き生きとした現在の発現現象学的時間分析を橋渡しする役割をも果たしていることが明らかになってきている」という。この初期から中期への「受動的綜合」を通じたフッサールの時間論の展開は、山口氏が主眼としている論点である(このことも谷氏は否定しないだろう)。

ところが、である。注意していただきたいが、いま山口氏の著書から引用した文のなかで引用されている『内的時間意識の講義』の箇所(X, 81)で山口氏が「縦の志向性」(傍点箇所)と訳している原語は、Längsintentionalitätである(こゝでは、立松訳以来の標準的訳語を踏襲している)。前述のように、『週刊読書人』(同年二月二十四号)で山口氏は、この語を「横の志向性」とするのが適訳だとしていたはずだ。ここでは、山口氏の訳語が「逆転」しているように思われるのである(谷氏が「不明確」と指摘した一例であろう)。

さて、ここで振り返ってみれば、そもそも「縦／横」という日本語は相対的である(どこからどう見るかという視点によって変わる)ことを指摘

しておかねばならないだろう。『広辞苑』(第五版、岩波書店)では、次のように説明されている。

「縦」…①上から下への方向、また長さ。「―書き」、②前から後ろの方向、また長さ。「―に並ぶ」、③南北の方向、また距離。④「たて糸」の略。⑤時間の流れに沿った面。以下略。

「横」…①縦に対して垂直の方向。上下に対して、水平の方向。立っているものが寝た位置。また、前後に対して、左右の方向・位置。②系列・系統を超えて、地位・水準などが同じであるとの関係。「―のつながり」③正面・背面ではなく、側面。特に、左右の立面。以下略。

「縦」の①の例としては、書籍やパソコンの画面で「横書き」に対して「縦書き」と呼び、座標のx軸を「横軸」と呼ぶのに対してy軸を「縦軸」と呼ぶのを挙げられるだろう(山口氏は基本的にこの用法に固執しているように思われる)。しかし、「縦」の②の例として、「縦列駐車」「日本縦断」などを挙げると、少し事情が変わってくる。その一つの例として、「ちようちようお」を『広辞苑』で調べると、次のように書いてある(次頁上段の写真Ⅱ図1を見ながら、読んでいただきたい)。

「ちようちようお(蝶蝶魚)…体は側扁する。黄色の地に暗褐色の縦縞があり、白と黒の横帯が目を横切る。(傍点引用者)

「暗褐色の縦縞」と呼ばれているのは、「前から後ろへの方向」(水平方向)に走る数本の縞であり、「白と黒の横帯」というのは、それを目のあたりで横切って、上下(垂直方向)に走る二本の帯のことである。これを①の

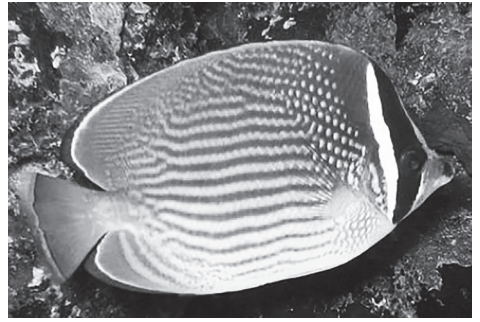


図1：ちょうちょううお

「縦軸／横軸」と比べると、「縦と横が逆になる」ことになる。

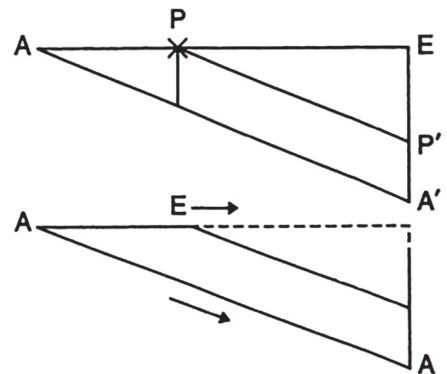
これは特殊な例と思われるかも知れないが、日本語のさまざまな例、例えば、「縦列駐車」「山群縦走」「日本縦断」<sup>⑮</sup>「縦貫道路」「三列縦隊」などを思い浮かべると、いずれも列をなして並んでいる「前／後」の方向（つまり、『広辞苑』の②前から後ろへの方向）、長い流れに沿う方向に對して「縦」という語が使われており、

「縦書き」「縦軸」の用法（つまり、『広辞

苑』の①上から下への方向）のみを「縦」として普遍化・絶対視できないことが分かる。⑤の「時間の流れに沿った面」が「縦」と呼ばれるのは、時間の流れを左から右への水平軸で描くとすれば、流れに沿って左から右へと水平に移動するのが「縦」と呼ばれることになる。それがまさに、フッサールが「縦の志向性 (Längsintentionalität)」という時の「縦」である。

もう一度、立松訳の『内的時間意識の現象学』（みすず書房、一九六七年）における「縦の志向性」と「横の志向性」のくだりを（立松訳を基本としながらも、適宜、分かりやすくするため拙訳にしながら）振り返ってみよう。フッサールはまず第十節で下図（図2）のような「時間の図表」によって、「経過状態の二重の連続性 (Doppelkontinuität)」(X, 29) を図示しながら、次のように述べていた。

次々に新しい今が現れるにつれて、今は過去へ変移し、それに伴って先行時点の過去の経過の連続性全体が《下方に》、一様に過去の深



- AE —— 今点たちの系列
- AA' —— 沈下する
- EA' —— 位相連続体（過去地平をともな  
った今点）
- E → —— 他の諸客観でもって充実化され  
ることもある今の系列

図2：時間図表

淵 (Tiefe) へ後退する。われわれの図では、不断のy軸 (Ordinaten) の系列が、持続する客観の経過の諸様態を示している。(X, 28)

ここで座標を表すときに使う「y軸」という語 (Ordinaten)<sup>⑰</sup> を、立松訳では「縦軸」と訳している。つまり、前述の「①上から下への方向」に對して「縦」という訳語を当てているのである。そして、第三九節で、「過去把持の二重の志向性」が論じられて、さきほど山口氏が引用した「流れの推移の中にあつて絶えず自己との合致統一を保ちつづける縦の志向性 (Längsintentionalität) がその流れを貫いている」(X, 81) というくだりが来る。そして少し後には、こう述べている。

「一方で」私が音に方向を向け、注意深く《横の志向性 (Querintentionalität)》へと入り込む場合には、……持続する音がそこに出現する……。《他方で》《縦の志向性》とそのなかで構成されるもの定位する場合には、私は反省する眼差しを音から原感覚の新

たなものと把持されたものとへ向け替えるのである。(X, 82)

要するに、この立松訳は、前述の「②前から後ろの方向」に対して「縦」という訳語を使い、「流れを貫いて」(図表のA E : x軸) 働くのが「縦の志向性」であり、他方、「流れを横切って」(図表のE A : y軸) 働くのが「横の志向性」と訳されるのである。注意していただきたいのは、第十節で「y軸」と訳せば問題なかったのに「縦軸」と訳していた上下方向に働く志向性が、第三九節では「横の志向性」と訳されることになり、「縦と横が逆転」することになるのである。「縦の志向性」と「横の志向性」という訳語をこのように使おうとするなら、誤解を避けるためには、第十節の *Ordinaten* は「縦軸」ではなく、「y軸」と訳すべきだったろう。あるいは、第四三節では、類似の図表とともに、「垂直系列 (*Vertikalreihe*)」(X, 93) という語が使われるが、これに倣って、「縦軸」ではなく「垂直軸」と訳すこともできただろう。

立松訳およびそれを踏襲した谷・斎藤・榊原の各氏が使っている「標準的」訳語は、*Quer-*を「横」と訳し、*Längs-*を「縦」と訳すという、『独和辞典』<sup>18)</sup>の基本的な方針に従ったものである。ただし、注意すべきは、「y軸/x軸」と訳しておけばよかったところに「縦軸/横軸」という訳語を使ってしまうと、それは「縦の志向性/横の志向性」と対応しておらず、あえて言えば、「縦軸に働く横の志向性」と「横軸に働く縦の志向性」のような言い方をしなければならなくなる。そのことをはっきりと明記しておかない限り、時間図表の垂直軸 (y軸) を「縦軸」、水平軸 (x軸) を「横軸」と呼ぶのを当然と思っている読者からすると、「縦軸/横軸」に対応させて「縦の志向性/横の志向性」と誤解してしまう恐れが確かにある。その意味では、「縦軸/横軸」という訳語と「縦の志向性/横の志向性」という訳語を上記のような説明なしに使うのは、ミ

スリーディングだと言えよう。<sup>19)</sup> それに対し、山口氏が『現象学ことはじめ―日常に目覚めること』(二〇〇二年) および『存在から生成へ』(二〇〇五年) で採用した訳語は、「縦軸/横軸」を基本に据えて、「縦軸」に働くのは「縦の志向性」、「横軸」に働くのは「横の志向性」と訳すべきだ、というところから来ている。しかし、それは「標準的」訳語と比べると、「縦の志向性/横の志向性」が逆転したものになってしまい、前述のような谷氏の批判を招くことになった。

それが余計な混乱を招く怖れがあると考えたのであろう、その後、山口氏は、『人を生かす倫理―フッサール発生の倫理学の構築―』(知泉書館二〇〇八年) では、「縦の志向性/横の志向性」という訳語に替えて、「過去把持の縦軸の交差志向性 (*Querintentionalität*) と横軸の延長志向性 (*Längsintentionalität*)」という新しい訳語の提案をするようになった(一五四頁)。<sup>20)</sup> 「縦軸/横軸」によって方向をはっきりさせた上で、「横の志向性」が「横軸」を連想させず、「縦の志向性」が「縦軸」を連想させないように、それらの訳語を断念し、「交差志向性」と「延長志向性」という訳語を提案したのである。この提案は、「縦軸/横軸」と「縦の志向性/横の志向性」が繋げて連想されるのを避けて、原意を汲み取るためのそれなりの工夫がされたものとは言えよう。

しかしながら、私見によれば、従来の「縦の志向性/横の志向性」の方が訳語としてシンプルだし、「縦に働く志向性」と「横に働く志向性」という、直交する二重の志向性があるというのが直感的に分かりやすいのに対し、「交差志向性」と「延長志向性」という訳語では、そのようなイメージが持ちにくい。逆に、「交差/延長」によって、いろいろ余計なイメージが喚起されてしまい、何がポイントなのかが分からなくなる恐れがある(「二重」というだけでなく他にもいろいろありそう) ように思われる。とりわけ、「延長」というのは、デカルト以来の伝統のある手垢の

ついた用語なので、そこからあらぬ誤解を招きかねないところもあるかと思う。

さて、そのような論争に決着がつかないままに、谷沢『内的時間意識の現象学』（ちくま学芸文庫、二〇一六年）が刊行され、ここでは「標準的」訳語が維持され、かえって誤解を招く記述もあったため、山口氏は新著『発生の起源と目的—フッサール「受動的綜合」の研究』（知泉書館二〇一八年）の第I部第二章第三節「過去把持の二重の志向性とその訳語について」において、再度この議論に紙面を割くことになった。そこで、谷沢について山口氏が指摘しているいくつかの箇所については妥当なところがあるので、ここで私なりにまとめて、注意喚起をしておきたい。

(一) まず、第十節の「われわれの図〔＝時間図表〕では、「複数の」縦軸の恒常不断の系列」（一九九頁、傍点引用者）という箇所につけられた訳注（62）では、「図表で言えば、上の図表のE—P—Aの縦軸と、Pから真下に向かう縦軸であろう」（二二五頁）と述べられている。前述のように、「(二)に言う「縦軸 (Ordinaten)」とは幾何学座標の「y軸」のことであり、垂直方向のほうである。それに対して、「流れの縦方向で以前の把持それぞれが……」（二二二頁）という時の「流れの縦方向 (Längsrichtung)」というのは、「流れに沿って、あるいは流れに同行する (dem Fluß entlang oder mit ihm gehend)」（X, 29）（縦長の）方向なので、それは時間図表でいえば水平方向のほうだから、訳注（85）で「流れの縦方向」——この「縦」は第十節の時間図表での垂直方向であろう」（二三三頁）とあるのは間違いで、「この「縦」は第十節の時間図表での水平方向であろう」と訂正されるべきだろう。

(二) 第三九節で、「縦の志向性が、すなわち「意識の」流れの進行のなかでおのれ自身との恒常不断の合致統一のうちにある志向性が、「意識それ自体の」流れを貫いていくのである。」（三二六頁）という箇所「縦の

志向性」と訳すこと自体はとりあえず問題ないと思うが、この「縦の志向性」は「意識の流れに沿って、あるいは流れに同行する」志向性なので、時間図表で言えばx軸方向（水平方向）に働いているはずである。その「縦の志向性」についての訳注（91）において、「英訳者 Brough はそれを horizontal intentionality（地平的志向性）と訳している」として、「この志向性は、流れに沿って縦方向に (Längsweise) 走るのであり、これが horizontal という用語が仄めかそうとしていることである」（三六六頁）という Brough の訳注を引用している。このように「縦の志向性」が「流れの縦方向 (Längsrichtung)」すなわち x 軸方向（水平方向）に働くのであれば、第十節で、y 軸（垂直方向）である Ordinaten を「縦軸」と訳してしまったら、「縦」という言葉で指している方向が入れ替わることになる。訳者としてはそのことをはっきりと断るべきだっただろう。

(三) 逆に、同じ第三九節の「横の志向性」（三一七頁）についての訳注（104）で、Quer-を transverse と訳した英訳者 Brough の訳注から、それは「内在的な時間客観に向かう志向性は、流れの方向を横切ると言える」（三六九頁）と引用して「横の志向性」と訳すとしており、そのこと自体はとりあえず問題ないと言えるが、「流れの方向を横切る」というのは、第十節の時間図表で言えば、「流れの方向」である x 軸（水平方向）を横切る y 軸方向（垂直方向）であるはずだから、「(二)でも y 軸を「縦軸」と訳してしまうと、「横」と「縦」が入れ替わることになる。ここでもそのことを訳者としては注記すべきだっただろう。

(四) 同様に、第四三節の「縦方向の意識流にしたがう」（ように下降していく）(dem Bewußtseinsfluß der Längsrichtung nachgehend)」（三三六頁、「」内は訳者の補足）という箇所も、「流れの縦方向」と同様に、時間図表でいえば x 軸（水平方向）のほうなので、そこにつけられた「ように下降していく」という、垂直方向が考えられているような補足は誤解を招

くし、また、そこに付けられた訳注(235)で、「ここでは時間図表の縦方向(垂直方向)が考えられている」(三九三頁、傍点引用者)と説明するのも誤まりで、ここでは「時間図表の横方向(水平方向)が考えられている」と言わねばならないだろう。ここでも、「縦方向の意識流にしたがう」というのが、「流れの縦方向」にしたがうのと同様に、時間図表でいえば「横方向(水平方向)」になるということが、「縦」という訳語にひきずられて「垂直方向」を指すものとされてしまっていると言わざるをえない。

要するに、それなりの説明(解説)をつければ、立松訳を踏襲した「標準的」な訳語は使えるが、逆に言えば、そうした説明なしには誤解を招く、というのが、私の結論である。そのような説明(解説)がない限り、山口氏が危惧しておられるように、「横の志向性／縦の志向性」という訳語は、「横軸の」横の志向性／「縦軸の」縦の志向性と誤解される恐れがある(そう誤解している人も少なくないかも知れない)。

実際、谷氏の『意識と自然―現象学の可能性を拓く―』(勁草書房、一九九八年)にもそのような箇所が見られる。谷氏は、前述の図表を使いながら、次のように述べている。

ここで〈A—E〉の横軸は、すでに確保された(一)客観的時間を表し、「現在」はAからEに進んでいく。Eから発する「横の志向性」は、この横軸方向において、Pを把持し、さらにはAを把持する。他方、〈E—P—A〉の縦軸は、まだ客観的時間へと構成されていない「先現象学的時間性」……を表す。「縦の志向性」は、この縦軸系列の諸位相(先経験的時間を構成している意識の諸位相)を把持している。(三九六頁以下、傍点引用者)

ここでは、「横軸」に働く「横の志向性」と「縦軸」に働く「縦の志向性」という用語法が使われているが、正しくは、「縦の志向性」は、この横軸方向において、……「横の志向性」はこの縦軸系列の諸位相(……)を把持している」とすべき(つまり「縦／横」という表記が入れ替わる)であっただろう。これも、「x軸／y軸」に対して「横軸／縦軸」という訳語を使ったために、それに引きずられて、「横の志向性／縦の志向性」としてしまった誤りの一例であるだろう。

ということ、[谷・山口論争]についての私なりの結論は、次の四点にまとめられよう。

- ① 時間図表で使われる「x軸／y軸」に対して、もとのドイツ語にはないニュアンスをもった「横軸／縦軸」という訳語を使うことは避けたほうがいい。
- ② *Längsintentionalität*を「縦の志向性」と訳し、*Querintentionalität*を「横の志向性」と訳すことに、それ自体として問題はない。
- ③ ただし、もし①で「横軸／縦軸」という訳語を使うなら、②では「縦／横」が入れ替わってしまうことになるので、そのことについて、読者の注意を促す必要がある。
- ④ 「x軸／y軸」に対して「水平方向／垂直方向」を使うなら、「水平方向」に働く「縦の志向性」と、「垂直方向」に働く「横の志向性」とすることも可能だろう。

#### おわりに

どうやら、訳語の問題に紙数を割き過ぎたようだ。谷氏も山口氏も、重要なのは訳語の問題ではなく、「事象そのもの」を適切に射当てているか、という点において意見を異にするものではないだろう。お二人は、

それぞれに強調したい論点を持っており、本稿ではそれらの論点を十分に紹介し考察するには至っていない。そして、私が強調したい論点はまたお二人とは異なり、現象学的時間論と現象学的空間論をパラレルに論じることであった。そこから振り返ると、私は、現象学的時間論において(過去)把持について言われる「縦の志向性」と「横の志向性」の議論は、現象学的空間論における「間隔 (Abstand)」と「距離 (Entfernung)」の議論(前述)とパラレルに論じることができるのではないか、というアイデアをもっている。しかし、それについての考察は、稿を改めて論ずるほかない。

## 注

- ① 静岡大学教養教育「哲学・思想分野」分科会編集の『哲学思想への誘い』(二〇〇三年三月)。その後、拙著『可能性としてのフッサール現象学―他者とともに生きるために―』(見洋書房、二〇一八年)の第一部第一章に収録。
- ② フッサール・データベースは、『フッサール全集』(Husserliana)をテキストとして作成されたテキスト・データベースを使って、特定の語句について検索を行った結果が収録されたデータベースである。現在も生きて利用されている。次を参照。 <http://www.let.osaka-u.ac.jp/~cpshamahUA/HUA-home.html> (二〇一九年九月三〇日アクセス)
- ③ 共同研究者として、谷氏のほか、貫成人、和田渡、水谷雅彦、榊原哲也の各氏に協力いただいた。
- ④ 谷氏と私のほかの呼びかけ人は、斎藤慶典、榊原哲也、貫成人、野家伸也、宮原勇、和田渡、山口一郎の各氏であった。
- ⑤ 拙稿「ナラティヴとパースペクティヴ―〈かたり〉の虚と実」をめぐって―(木村敏・坂部恵監修『〈かたり〉と〈作り〉 臨床哲学の諸相』、河合文化教育研究所、二〇〇九年一月)、および拙稿「二つの『臨床哲学』が再会するとき」(木村敏・野家啓一監修『臨床哲学とは何か 臨床哲学の諸相』、河合文化教育研究所、二〇一五年一月)。

- ⑥ 例えば、和田渡氏の「根源への遡行―ベルナウ草稿(一九一七―一八)における意識流の問題」(『同志社哲学年報』8、一九八五年)や「遡行的変遷―フッサール初期時間論における「根源」の問題」(『哲学』38号、一九八八年)や、榊原哲也氏の「フッサールの時間意識―初期時間論における「時間構成的意識流」の概念の生成」(『哲学雑誌』104号、一九八九年)などである。

⑦ 拙稿「時間と他者のアナロジー―地平と間主観性の現象学序説―」(日本哲学会編『哲学』、38号、一九八八年)参照。

⑧ 拙稿「空間の現象学にむけて」(静岡大学人文学部『人文論集』第四四号の二、一九九四年)、同「幾何学的空間と生きられる空間」(静岡大学人文学部『人文論集』第四五号の一、一九九四年)。この二本の論文は、拙著『フッサール間主観性の現象学』では大幅に削られて、第一部第五章「身体とパースペクティヴの空間」に組み込まれたため、その後、拙著『可能性としてのフッサール現象学』(二〇一八年)第二部第一章・第二章で元の形を復活させることになった。

⑨ そのため、前掲拙稿「時間と他者のアナロジー」は、拙著『フッサール間主観性の現象学』(一九九五年)の第二部第八章「他者と時間・空間」に組み込まれた。

⑩ その他に、一九一八年から一九二六年の講義録と草稿から成る『受動的総合の分析』(フッサール全集第十一卷)や一九〇五年から一九三五年の講義録と草稿から成る『間主観性の現象学』(フッサール全集第十三―十五卷)などにも、時間論に関わる議論が含まれている。

⑪ "Grundlegende Untersuchungen zum phänomenologischen Ursprung der Räumlichkeit der Natur," in: Faber, M. (ed.), *Philosophical essays in memory of Edmund Husserl*, Harvard University Press, 1940. (新田義弘・村田純一訳「自然の空間性の現象学的起源に関する基礎研究―コペルニクス説の転覆―」講座・現象学』第三卷、弘文堂、一九八〇年。ほか) "Notizen zur Raumkonstitution," hrsg. von A. Schütz, in: *Journal of philosophy and phenomenological research* 1, 1940. があ

⑫ 同様に、『間主観性の現象学』(フッサール全集第十三―十五卷)にも、空間論に関わる議論が散見される。例えば、山口氏との共同監訳による

フッサール『間主観性の現象学Ⅱ』（ちくま学芸文庫、二〇一三年）の第一部「自他の身体」を参照。

⑬ さちんと参照箇所を示すことは今後の課題である。

⑭ 『フッサール全集 (Husserliana)』からの引用については、本文中括弧内にローマ数字で巻数を、アラビア数字で頁数を表す。

⑮ なお、ここでは、Retentionを谷氏は「把持」と訳し、山口氏は「過去把持」と訳していたが、その後、共同監訳の『間主観性の現象学』では、「過去」把持」という訳語を使うことにした。Retentionという語には、Re-（再、反の意）という前倚辞がついてはいるが、主題的に「過去」という意味は含まれていない。そのため、主題的に過去に向かう「想起」と異なり、非主題的に「たったいま」を保持しているだけのRetentionに、初めから「過去」という訳語をつけてしまうのは、誤解を招くという趣旨からである。

⑯ 因みに、先日或る台風が、宮崎の東方海上を北上し、四国と九州の間の豊後水道を突っ切って広島県から島根県に抜けていった時、テレビの天気予報の番組では、「日本列島を縦断」と呼んでいた。基本的に長い島の長辺に沿って移動するのは「縦断」で、その長辺を横切るのは「横断」であるはずだ。ところが、日本列島は弓なりになっているため、東北地方では南から北への移動が「縦断」であるのに対して、四国・中国地方では南から北への移動は「横断」のように思えるのだが、どうも天気予報の用語法としては、どの地方にあっても、南北の移動は「縦断」と呼ぶようである。

⑰ これに対して、y軸と直交するx軸はAbszisseと呼ばれるが、ドイツ

語ではどちらにも「縦／横」という語やニュアンスは含まれていない。フッサールも Abszissenrichtung という語を Ordinate という語とともに使っている箇所がある (X, 332)。

⑱ 例えば、『木村・相良独和辞典』（博友社、一九六三年）、シンチンゲル他『現代独和辞典』（三修社、一九八〇年）富山芳正（編集主幹）『独和辞典』（郁文堂、一九九一年）など。

⑲ 例えば、『現象学事典』の「時間」の項目（斎藤氏執筆）で、「縦の志向性」と「横の志向性」の理解が間違っているとは思えないが、気をつけたいといけないのは、それに先立って「時間図表」の説明があり、そこに、「図の縦軸がおのの時間位相であり……」とあるが、この「縦軸」といま引用した箇所の「縦の志向性」とでは、「縦」の方向が入れ替わっている。そのことを読者に誤解のないように説明しておく（あるいは、「縦軸」ではなく「y軸」とする）べきだっただろう。他方、同書「時間意識」の項目（榊原氏執筆）では、時間図表の「縦軸／横軸」との対応関係についての言及はないので、そのような注記は不要であろう。

⑳ そのため、山口氏は、『現象学』とはじめ「日常に目覚めること」改訂版（日本評論社、二〇一二年）でも、旧版で「縦の志向性／横の志向性」としていた箇所を、「過去把持の縦軸の交差志向性 (Querintentionalität) と横軸の延長志向性 (Längsintentionalität)」と修正している。

㉑ その意味では、horizontalは「水平的志向性」と訳すほうがよかっただろう。

（大阪大学名誉教授）